

佐高的「グローバル」構築の萌芽

栃木県立佐野高等学校 グローバル教育統括アドバイザー
宇都宮大学 国際学部 教授 松金公正

時代は平成から令和へ、栃木県立佐野高等学校・附属中学校のSGH活動は4年目を迎えた。最初に取り組んだ生徒たちは卒業し、佐高の特徴として「グローバル」を定着させるべき新たな段階に入ったともいえる。

年度途中で風水害、年度末には新型コロナウイルスによる学校行事の見直しなど、さまざまな障害があった一年であった。特に世界的な疾病の拡大はまさにグローバル化の進展に伴う副産物であり、今後SGH活動の中で考えていくべき課題であろう。

そのような中、生徒たちは、課題発見とリサーチ・クエスチョンの設定、フィールドワークを伴う調査・研究、課題解決につなげるプレゼンテーションなどにおいて極めて高いパフォーマンスを示した。上級生から下級生への経験の継承と蓄積によるものであることは間違いなく、ここに佐高が目指す「シンカ」の一端を見出すことができよう。このような結果は、担当教員の精力的な指導はもちろん、高校全体としての確かな指導が継続的に行われなければ難しく、教科学習とSGH活動が高校全体で包括的に実施された賜物であろう。

他方、今後継続的にこの活動を展開するために必要ないくつかの課題が明らかとなった。ひとつは、従来の活動をどのように取捨選択し、より効果的にするための整理と統合をいかにして進めるかという点である。また、もうひとつは、3年間の包括的展開という観点から、どのようにして他の教科学習と関係づけるかという点である。この2つをうまく解決し、栃木県内の他の高校が一定の準備をすれば導入することのできるモデルケースを作っていく必要があると考える。

「経験は重層的に蓄積することにより継承される」

SGH活動の4年目は、これまで3年間の経験を繋ぎ、これまで活動を振り返り、持続的に展開可能な活動に結び付けるそんな活動を期待したい。そして、佐野高校、附属中学校の4年目のSGH活動は、そのような期待をもたせるのに十分な成果を出してきたと思う。